

な事である。我々は戦つてゐるのだ、自分は闘つてゐるんだ。社會人よ、目覺めよ!! 學生諸友よ、頑張らう!!!

夕燒の空を飛ぶ鳥も無ければ、吾家へ急ぐ人の影もない。「荒涼」たる北邊の日暮——六時二十分「作業止め」がかゝる。だが直ぐ止める隊は無い。割當量が終らないのである。誰も何とも云はない。眼と瞳を交へて、ニツと笑つて互にうなづくだけの事である。そして凡そ物が見える程度の明るさのうちは作業が続けられる。「くそッ」「ええイ」えぐる様な聲だけの作業場である。蠟燭の仄明で夕食、板と筵の上に横になるのが九時過ぎ、だがかうした中でも、若さ、朗らかさを誇る自分達は、明日の力を求めて愉しく夢路に入る。四時起床、朝禮、故郷遙拜がある、他事かも知れないが北邊の地で行はれる此の行事は、自分を素直に、何だか、涙の出る様な氣持にした良い印象として残つてゐる、そして闘ひは始まる、異様な形の〇〇帽を着けて大自然との争ひは開かれる、斧を揮ふ者、殘根に喰ひ下る者、一層剥いだツンドラの更に次を

切る一人、腰近くまで冷い泥水に沈んでぐしよぬれのそれを掴み出す一人、地響と共にぶつ倒れる原始木、鈍く、而も鋭く光る鋏先き、この様にして貴いとも云へる〇が、一塊一塊と獲られて行く——凡てを打ちのめす様な雨、沁るトロツコそれにしがみ付く自分、支えてくれる戦友——而し見る、刻一寸、尺一刻と吾々の〇〇は延びるではないか、唯〇〇、〇〇だけだ!! 闘ひは続けられた。そして遂に吾々日本學生の信念と汗によつて、豫定の事業が完成されたのだ。

向ふでも感じ、歸つてから更に痛感するものは、學生の實踐力である。適當な詞かどうか知らないが「逞しきインテリ」でなければ斷じてこれだけの仕事は出来ないと思ふ。

海 中 に 島 鍛 亮 に 範

我々は去る七月三十日・三十一日の二日間舞鶴海兵團で訓練を受けた。言ふまでもなく我々若人にとつて意義深き生活であつた。各教官の御熱心なる御指導に依り、僅かながらも大きな結果を得たの

である。

海軍體操。早朝よりの此の體操は我々にとつては全くきつく感ぜられた。然ラヂオ體操では生ぬるい、海軍體操を通して苦難を恐れぬ膽の太い日本男子とならねばならぬ。

競漕。之は完全に全員が一致協力して櫓が揃はなければ、小さな八米のカッターさへ前進する事は出来ない。此の訓練に依つて不撓不屈の精神、協力一致の必要、職域における責任感が養はれるのである。

僅か二日間の訓練ではあつたが、規律正しい勇ましい訓練を受け、凜然たる海軍魂を把握し、概念的知識よりも體驗こそ最も尊ぶべきものであることを痛感した。世界の海は日本の海だ。海を知らんとするには海に出なければならぬ。今ぞ大和魂を海に生かし、海に現はす決戦の秋だ。若人の起つ時は來た。其の若さを海に捧げ戦ふ海へ若さを乗せて米英撃滅に征く時だ。小成の境域に踟躕する自我を蟬脱し、大乘の心魂を培ひ八紘爲宇の理念貫徹に邁進しようではないか。